

□海外文献紹介□

無症状平均的リスク者で遠位大腸の過形成性ポリープの存在は近位の腺腫を予告しない

Distal colonic hyperplastic polyps do not predict proximal adenomas in asymptomatic average risk subjects: *Rex DK, et al* (Gastroenterology 102: 217-319, 1992)

年齢が50～75歳で、便潜血陰性で大腸のスクリーニング内視鏡検査を受けた482人の無症状平均的リスク者で、遠位大腸に存在する過形成性ポリープの意義について検討した。

その結果、S状～下行結腸移行部より遠位に過形成性ポリープのあった群での近位結腸に腺腫のある頻度

は18%で、遠位大腸にポリープの全くなかった人での頻度15%と大差がなかった。

一方、遠位大腸に腺腫があった群での近位での腺腫の頻度は38%で、前2群に比べ有意に高かった。

したがって著者らのデータでは、無症状平均的リスク群での遠位大腸における過形成性ポリープの存在は、近位結腸での腺腫の予告因子にはならないとの考えを支持した。

〔訳者コメント〕 遠位大腸に過形成性ポリープがあると、近位大腸に腺腫の頻度が高いとする報告がいくつかみられる。われわれの日常の検査でも、直腸に過形成性ポリープ(小白色隆起)を認めることはまれでない。このようなケースですべて全大

腸内視鏡検査が必要と言われたら検査がますます増えて困ると日頃思っていたので、本論文はそのような理由が成立しないことを教示してくれ、われわれにとって大変有意義だった。

最近出た厚生省の大腸がん検診マニュアルでは、潜血陽性者に対する精密検査の理想として全大腸内視鏡検査を推奨している。本論文では、上記のことは潜血陰性者についてであり、陽性者や症状のある人、あるいは大腸癌の家族歴のある者では、全大腸内視鏡検査を奨めていることは至極当然の帰結と思う。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林 世美 抄)